

若い世代、特に中学生や高校生に対して、文学館として実施すべき事業、実施が望まれる事業について
(答申)

2009年(平成21年)8月31日

町田市民文学館運営協議会

目次

はじめに	1
第1章 協議を始めるに当たっての基本的な考え方と提言の観点	2
第2章 提言とそれを実行するための手法	5
◎報告骨子図	
1 夏休み創作講座「つくるぞ! 自分だけの物語」の開催	
2 「ポエムカードを作ってみよう 詩の作り方・楽しみ方講座」の開催	
3 中・高校生のための紙芝居ワークショップ「演じてみよう 紙芝居」 夏休み子どもフェア 中・高校生による上演会「紙芝居がやってきた」の開催	
4 「私の勧めるこの1冊」の募集	
5 アニメーション講座の開催	
6 展示「30分で分かる日本近代文学史」の実施	
7 若い人たちに魅力的な展示会の実施	
終わりに	15
参考資料—検討の詳細	
第1部 小・中・高校における読書推進活動の報告	18
1 町田市のある小学校の取り組み	
2 町田市のある中学校の取り組み	
3 町田市内のある都立高校の取り組み	
4 渋谷区内のある都立高校の取り組み	
第2部 文学館の事業について	28
1 本の世界、読書の世界に導くための導入的な事業	
2 読書の幅を広げ、深めるための事業	
3 文章表現、創作などに興味・関心を持つ児童・生徒を対象とする事業	
4 音読・朗読など、音声による表現に興味・関心を持つ児童・生徒を対象とする事業	
5 紙芝居の上演、創作に興味・関心を持つ児童・生徒を対象とする事業	
第3部 用語解説一覧	36
協議の経過	38

はじめに

町田市民文学館運営協議会（以下「協議会」という。）は、2007年10月4日、町田市教育委員会から「若い世代、特に中学生や高校生に対して、文学館として実施すべき事業、実施が望まれる事業等について、具体的にご提案ください」という事項について諮問された。「諮問の理由・要望」および「付帯事項」は、およそ次の通りであった。

1 諮問の理由・要望

町田市民文学館は、開館以来様々な事業を実施してきたが、来館者の多くは中高年者である。しかし、文学の魅力やことばの持つ力に触れることは、若い世代にとっても意義がある。そこで、学校教育との連携も視野に入れながら、若い世代を主たる対象にして、文学館がどのような事業を組んだらよいか、文学館の魅力を生み出すための取り組みに対する具体的な提言を、自由に、たくさん出していただきたい。また、それぞれの提言の試行があってもよい。

2 諮問時における付帯事項

- (1) 中学生や高校生とは、中学や高校の在校生か、その世代一般か。また、特に文学に関心のある生徒か、生徒一般か。
- (2) 文学館ができることは、文学教育か読書教育か。そもそも教育なのか。
- (3) 読書に対する中学生や高校生の現状はどうなのか。学校教育の中での文学教育、読書教育の現状はどうか。彼らを取り巻く生活環境、読書環境はどうか。

この諮問を受けて、協議会では、2009年7月まで、17回にわたって、協議を重ね、ここに「協議のまとめ」を取りまとめた。

「協議のまとめ」においては、後記の第1章において、前記の付帯事項に対する協議会の考え方と、それに基づく提言の観点を述べた。第2章においては、「協議のまとめ」骨子を図式化して示し、1から7の提言とそれを実行するための手法、提言を踏まえて実施された事業、あるいは、今後、実施を予定している事業等について述べた。

「参考資料－検討の詳細」においては、第1部に協議の基盤とした小・中・高校における読書推進活動の取り組みを記載し、第2部には、文学館の事業について提言の詳細を記載した。いずれもが、文学館が今後の事業を推進する上で、大いに参考にし、活用し得ると考えるからである。

この「協議のまとめ」が、町田市民文学館の事業の拡充に寄与し、小・中・高校生など、若い世代の読書活動の推進や言語文化享受の一助になることを願っている。

第1章 協議を始めるに当たっての基本的な考え方と提言の観点

1 協議を始めるに当たっての基本的な考え方

(1) 協議は小・中・高校の先生方から、読書に対する児童・生徒の現状、各学校における読書推進のための取り組みについて、話を聞くことから始めた。各学校における、読書推進のための懇切な取り組みについての詳細は、後記「参考資料一 検討の詳細」の第1部に記載したので、ご高覧いただきたい。

先生方の報告によれば、各学校において、自主的、自発的に読書に励む児童・生徒がいる反面、様々な理由で読書に立ち向かえない児童・生徒もいる。読書に対する児童・生徒の現状は多種多様であるが、次の点は、共通している。

- ①児童・生徒の「本離れ」といわれるが、本を読みたいという気持ちは、児童・生徒のだれもが持っている。
 - ②現在および将来において読書は必要である。
 - ③「朝読書の実施」「図書のおすすめ」など、読書推進のためには、本との出会いの場や、きっかけの場を作ることが有効であり、大切である。
 - ④児童・生徒の読書生活を充実・発展させる大切な要因は、おもしろい、楽しい、よく分かる、である。
 - ⑤児童・生徒の読書に対する興味・関心、意欲・姿勢、読書習慣等を育てるには、幼児期、児童期など、子どもが小さいうちからの導きや支援等が有効である。
- 上記①～⑤を踏まえ、協議の主たる対象を、小学生、中学生、高校生とした。

(2) 市民文学館などの社会教育機関は、一人ひとりの生涯学習を支援する機関である、という考え方に立ち、協議・提言の主たる対象を、特に文学に興味・関心を有する小・中・高校生と限定せず、小・中・高校生の多様な現状や要望等を視野に入れて行うことにした。

(3) 文学館を開設するにあたり作成した「(仮称)町田市立文学館基本計画書—市民が集う文学館の創造」所収の「4 目指すべき文学館像」に「(文学館は)『文学はおもしろい』というメッセージの発信源」という記述に照らし、協議を進めるに当たっては、文学教育、読書教育というような「教育」という語にとらわれず、文学や読書に対する興味・関心を育て、文学作品を含めての読書のおもしろさ、楽しさ、喜び、大切さを実感させ、それによって、児童・生徒自らが、自らの読書世界を広げたり、深めたりする契機となるような事業等の提言に努めた。

(4) 文学作品を含めて、読書のおもしろさ、楽しさ、喜び、大切さなどを実感させるには、たとえば、作品の音読を通して、児童・生徒と本をつなぐ「読み聞かせ」、1冊の本を何人かで読み合う「読書会」など、様々なアプローチの仕方がある。そうした考え方のもとに、取り組みに有効な言語活動、言語文化を活用しての提言に努めた。

2 上記に基づく、提言の観点

文学作品をも含めて、児童・生徒を読書の世界に誘い、そのおもしろさ、楽しさ、喜び、大切さを実感させ、児童・生徒が自らの体験に基づいて、読書世界を広げたり、深めたりするような事業等の提言の詳細は、後記「参考資料・第2部」に記載したが、その大要は、以下の通りである。

- (1) 児童・生徒に物語の楽しさを実感させ、本の世界に導く事業として
 - ①読み聞かせやストーリーテリングは適切・有効である。保護者の中には、家庭で行う読み聞かせなどを行う際の選書や読み方について指導・助言を求める人もある。こうした要望にこたえる事業も考えたい。
 - ②エプロンシアター、パネルシアター、紙芝居、ペープサートなどの実施が有効である。
- (2) 自らの読書の幅を広げ、深めるための事業として
 - ①読書会、読書感想発表会等、児童・生徒の相互交流の機会を設けたい。
 - ②児童・生徒相互の図書のおすすめや紹介、それによるブックリストの作成・提供も有効である。
 - ③「作者に聞く会」「作家を囲む会」など、著者を囲む機会を設けたい。
 - ④中・高校生が自分たちだけの力では理解し鑑賞することが難しい本を読む際、ブックトークの実施、専門家を招いての指導・助言、映画やTV番組等の紹介など、理解・鑑賞を支援する事業を行う。
- (3) 創作・脚本の作成など、言語による表現活動に興味・関心のある児童・生徒に対する事業も考えたい。
- (4) 音読・朗読・群読など、音声による表現活動に興味・関心のある児童・生徒に対する事業を行う。
- (5) 文学館で行う各種の展示の中に、小・中・高校生を主たる対象にした展示を実施したり、展示事業の中に小・中・高校生を主たる対象にした催しなどを含めたりすることも考えたい。
- (6) 文学館の業務内容等を知らず一環として、小・中学生を主たる対象にした文学館オリエンテーリング、近代文学の概要についてのゲームを織り込んだウォークラリーなども行ってほしい。
- (7) アニメーション講座の開催など、児童・生徒を指導・助言する教職員や保護者等に資する事業も考えていきたい。

第2章 提言とそれを実行するための手法

報告骨子図

- 提言1 夏休み創作講座「つくるぞ！ 自分だけの物語」の開催
- 提言2 「ポエムカードを作ってみよう！ 詩の作り方・楽しみ方講座」の開催
- 提言3 「中・高生のための紙芝居ワークショップ 演じてみよう紙芝居！」
「夏休み子どもフェア 中・高生による紙芝居上演会」の開催
- 提言4 「私の薦めるこの1冊」の募集
- 提言5 アニメーション講座の開催
- 提言6 展示「30分でわかる日本近代文学史」の実施
- 提言7 若い人たちに魅力的な展示会の実施

提言1 夏休み創作講座「つくるぞ！ 自分だけの物語」の開催

(1) 現状

自ら長い作品を書き、それを自分で本にして友人間で回し読みする中学生、演劇部に属して脚本を作成する中学生、文芸部、演劇部に所属し、創作や脚本の制作に熱心な高校生、童話や絵本の制作を志す大学生など、言語による表現に興味や関心を持ち、制作に励む若者がいる。こうした生徒・学生たちの中には、よりよい作品を制作するための基礎的・基本的な指導や助言を受けたいと思う人、また、自分たちの作品を互いに披露しあったり、合評しあったりする機会や場を求めている向きもあるが、そういう機会が得にくい現状がある。

(2) 提言を実行するための手法

- ①作家など、専門家を講師に招き、創作講座を設ける。
- ②その講師から、自らのアイデアやモチーフを作品にしていくまでに必要な基礎的・基本的な知識や技法などについて教えていただく。
- ③上記②をもとに、教えていただいたことを受講者が、演習し、その結果を講師に見ていただいたり、参加者相互に披露しあったり、合評しあったりできるような講座、実技・実習を伴う講座にする。
- ④参加者による作品ができたなら、館内に作品を収納したポストを置き、来館者がそれを自由に読み、コメントもできるようにするなど、子どもたちの作品を読む機会や場を設置すると励みになる。
- ⑤メディアを活用するなどして、文学館は子どもたちのこうした活動を広く知らせるよう努める。
- ⑥こうした講座が、やがては、中・高校生自らが企画・立案・実行して、作品をつくり、自らの手で作品発表会や作品コンテストなどを実施するような方向に向けて育てていく。

(3) 事業の概要

上記の若者たちの現状や提言を実行するための手法を踏まえ、文学館が開催した「創作講座」の概要は、以下の通りである。

- ①講座は、2008年7月から9月にかけて開催した「コロボックル物語の世界 佐藤さとる展」の一環として、「つくるぞ！ 自分だけの物語」というテーマのもとに開催した。
- ②中高校生を対象とした講座と、小学校の中・高学年の児童を対象とした講座との2講座で行われた。
- ③中・高校生を対象とした講座は、「アイデアを物語へと育てるには」という主題のもとに、町田市民文学館運営協議会委員でもある作家・吉目木晴彦氏を講師とし、町田市内に住む8名の小（1名）・中学生が受講した。

講座では、自分自らが語りたいイメージやアイデアを「物語」に発展させていく時の大切な要素である、キャラクターの造型、ストーリーの構成、プロット、表現（文章）の作り方などについての実践的な指導と、講師と参加者相互の質疑がなされた。

- ④小学校の中・高学年の児童を対象にした講座は、「童話教室を開きます」という主題のもとに、町田市民文学館運営協議会委員でもある作家・国松俊英氏を講師とし、7月、8月の2回にわたり、18名の児童が参加して行われた。第1回目の講座では、講師が、小学生の書いた童話を紹介しながら、作文と童話との違いについて語り、その後、各児童に実際に童話を書かせた。第2回目には、前回に書かれた作品に対する講師の指導・助言が行われた。

両講座のアンケート結果から（p. 33参照）、受講者は講義内容がよく理解でき、興味・関心が強まり、参加者の期待にこたえた、今後に資することの多い講座であったと言える。ただ、受講者の少なかったことが惜しまれ、今後は、PRの時期や方法についての見直しや工夫が必要だという声があった。

提言2 「ポエムカードを作ってみよう！詩の作り方・楽しみ方講座」の開催

(1) 現状

- ①詩を読むことが好きで、自主的、積極的に詩を読んだり、詩作に励んだりする児童・生徒がいる反面、物語や小説などはよく読むけれど、詩の世界には近づこうとしない児童・生徒も多い。
- ②詩の世界から遠ざかりがちな児童・生徒をも対象にして、詩の魅力、詩を読む楽しさや喜びを実感させながら、優れた詩人の持つ、社会や人生に対する幅広い関心、鋭い直感力、豊かな発想力や想像力、自在な表現力等に気づかせるような講座の開催も意義がある。
- ③学校や家庭において詩作したという経験を持つ児童・生徒は多くないと思われる。そこで、身近なところから素材を見つけ、自分なりの構想や表現で詩作してみる機会や場を設けることも、児童・生徒が詩の世界と親しくなるきっかけとして有効である。

(2) 提言を実行するための手法

- ①昨年に続く第2回目の創作講座なので、今回は新しいジャンルを取上げたい。
- ②取り上げるジャンルは詩、中でも自由詩がよい。短い形式だけに、作りやすくもあり、わかりやすくもある。
- ③講座の際、文学館にある詩集などを並べて参加者に見せる。

(3) 事業の概要

2008年度に実施された、創作講座「つくるぞ！自分だけの物語」に続く創作講座関連の事業として、2009年度は、中・高校生を対象に、「ポエムカードを作ってみよう！詩の作り方・楽しみ方講座」を2回にわたって開催する。講師には、詩人、絵本作家、エッセイスト、翻訳家として幅広く活躍している木坂涼氏を招き、講座の第1回目には、詩の楽しみ方や詩の作り方について話していただき、その後、宿題として、参加者それぞれに詩作または好きな詩の紹介を課する。第2回目では、それぞれの作品にイラストをつけて、各自の詩のカード（ポエムカード）を作るというもので、詩作の基礎・基本を学び、読書感想画に似た詩画を作成して、詩の楽しみ方を体験させることをねらいとしている。

提言3 「中・高校生のための紙芝居ワークショップ 演じてみよう紙芝居！」 「夏休み子どもフェア 中・高校生による紙芝居上演会」の開催

(1) 現状

紙芝居は、古い歴史を持ち、優れた特性を有する日本独特の文化である。街頭紙芝居とは全く違う、教育の場でも演じられる優れた作品が、最近は増えている。しかし、幼児を除き今の子どもたちは紙芝居に接する機会が少ないようだ。そのため、当然のことながら、紙芝居の実演や制作について理解している向きも少ない。

一方、現在、幼稚園、保育園のほか、高齢者施設、病院などの場で、様々な紙芝居が演じられている。海外諸国でも演じられたり、作られたりして注目が集まっている。紙芝居は、演じることによって、作品の理解が深まっていくうえ、コミュニケーション能力も養うことができる。言葉の力を養う点で大変有効なものである。将来の日本を背負う中・高生たちが、紙芝居についての知識や技法を身につけることが期待できる。

(2) 提言を実行するための手法

- ①まずは、紙芝居を「演じる」を目標にし、それに必要な理論や実技が取得できる講座を実施する。
- ②講師には、理論や実技の両面について指導ができる専門家を招く。
- ③講座の対象は、児童・生徒・学生のいずれでもよいが、作品解釈に基づいた演じ方を目指す場合、やや絞って10代以上が適当である。
- ④開催の時期、期間は受講しやすい春休み、夏休みなどが適当である。
- ⑤受講の成果を披露できる機会や場を設ける。

(3) 事業の概要

- ①中・高校生を対象に、紙芝居の形式、特性および実演に際して必要な基礎的・基本的な技法について学んだ後、一人ひとりが実演指導の手ほどきを受ける、という文学館で初めての講座である。
- ②中・高校生が受講しやすいように、講座は夏休み中の2日間とし、そのいずれか1日を選んで受講するようにする。
- ③講師には、町田市民文学館運営協議会委員で翻訳家、紙芝居文化の会運営委員の野坂悦子氏にお願いする。
- ④受講生の研修の成果を披露する一環として、8月に行われる「夏休み子どもフェア」において、小学生を対象に上演し、小学生との交流を図る。

提言4 「私の薦めるこの1冊」の募集

(1) 現状

現在、各中学・高校では、様々な形での読書推進活動が実施されている。たとえば、生徒による生徒に向けての図書のおすすめ（「私の1冊キャンペーン」）、校内での読書感想文コンクール、学級読書会、「総合的な学習の時間」における「名作探訪」、生徒の希望する作家を招いての講演会、などがある。

上記はいずれも、読書への関心を高め、読む力を広げ、深めるのにきわめて有効であると思われる。同時に現在の児童・生徒の本の選び方や、読み方などもわかり、今後の事業の企画等の参考にもなる。

文学館が、将来において「書評座談会」のような事業も視野にいれ、それに必要な礎石を順次据えていくことは大いに意味がある。

(2) 提言を実行するための手法

中高生が書きやすく、参加しやすいような募集形態をとる。応募された作品は、「私の薦めるこの一冊」としてまとめ、読書に関する幅広いコミュニケーションに発展するように活用する。

(3) 事業の概要

- ①対象は中・高校生とする。
- ②中・高校生が応募しやすいように、今回は作品や作者を特定せず、選書は一人ひとりの中・高校生自らの選択にまかせる。
- ③書評、感想のように内容を特定せず、応募者が本を選んだ理由、お薦めポイントなどを200字程度にまとめることとする。
- ④応募者の利便を図り、応募作品は、文学館および各市立図書館に設置したポストに投函する。
- ⑤文学館は、応募作品を冊子にまとめ、応募者に配付するほか学校図書館や市立図書館に置いて市民の閲覧に供する。

提言5 アニマシオン講座の開催

(1) 現状

2001年に「子どもの読書活動の推進に関する法律」が制定・公布され、「父母その他の保護者は、子どもの読書活動の機会の充実及び読書活動の習慣化に積極的な役割を果たす」こととされた。

しかし、家庭によっては、人間の成長過程における読書や読書活動推進の意義は理解できるが、具体的にどのような指導・助言をしたらよいか戸惑い、それに対する指導・助言・情報の提供等を求める声もある。例えば、家庭において読み聞かせを行う場合の選書やその進め方についての指導・助言・情報の提供等を求める声はその一例であろう。また、学校における読書推進のための手立てについての指導・助言を求める教職員もいる。

(2) 提言を実行するための手法

上記の家庭や学校の教職員が、どのような本を、どのように読ませたらよいか、それについての指導・助言・情報提供などの事業等を行うことも文学館の役割の一つである。協議会は、学校の教職員、児童・生徒の保護者、読書に熱心な市民を主たる対象にしたアニマシオン講座の開催を提言する。アニマシオンとは、児童・生徒が、自分たちの読んだ本についてゲームを楽しみながら、1冊の本を丁寧に、細かなことにも留意して読む力を育てるものである。同時に、指導者（教職員や保護者）の読む力の強化にもつながる。

(3) 事業の概要

文学館はこの提言を受け、2009年度にアニマシオン講座を開催する。講座には、小学校教諭でアニマシオンの経験が豊かな飯島久美子氏を講師とし、アニマシオンの理論とその具体的な進め方についてご指導いただき、受講者が講座で得た成果を学校や家庭等で発揮していただく。開催期間は2009年10月から2010年2月の月1回とし、参加人数は20名を予定している。

提言6 展示「30分でわかる日本近代文学史」の実施

(1) 現状

大学を受験する高校生等の中には、文学史の学習に困難を感じている人もいる。実際に読んだこともないような作家や作品を覚えねばならず、リアリティーが感じられない向きもある。

(2) 提言を実行するための手法

- ①大学を受験する高校生等に対する応援事業の一つとして、明治時代以降の日本の近代文学史の歩みを展示して、高校生等が自由に見られるようにする。
- ②展示で取り上げる作家は、中・高校の教科書等に定番の夏目漱石、森鷗外、芥川龍之介、横光利一、太宰治などに絞ってもよい。
- ③取り上げる作家の大きな写真、それに主な著作、略歴などを記したビジュアルなパネル、更に著作の現物（本）や当時の新聞等があるとよい。高校の授業で行っていることとリンクしたものにする。

(3) 事業の概要

大学を受験する高校生等に対する応援事業として、当面は文学館1階のロビーを使用して、明治時代以降の日本の近代文学史の歩みを展示する。

提言7 若い人たちに魅力的な展示会の実施

(1) 現状

2009年度、文学館では、春に「まちだ作家博覧会」、夏に「安野光雅展」、秋に「森村誠一展」、冬に「ことばの森の住人たちー町田ゆかりの文学者展」を実施する計画を立てている。

(2) 今後の企画立案に対するための提言

- ①町田にゆかりのある文学者展だけでは、入館者に限界がある。アーカイブは町田に限定するとしても、展示は地域にこだわる必要はない。
- ②町田にゆかりのある文学者展は2年に1回くらいにとどめ、たとえば、「小林多喜二・蟹工船」など、若い人の関心に応えるような展示をしたらよい。
- ③町田を舞台にした作品展等も考えられる。
- ④年間実施計画の中に幼児を含め、子どもたちが楽しめる、子どもたちが喜べる、という観点からワークショップの企画もしてほしい。

(3) 提言をうけ実施中の事業の概要（「安野光雅展」）

- ①子どもを対象とするワークショップとして、会期中、「だまし絵で遊ぼう」などのコーナーを設置する。
- ②同じく子どもを対象にワークシート「旅の絵本で見つけた」などを用意する。
- ③小・中・高校生を対象に「風景画の写生会」を実施する。
- ④読書会の実施、文学散歩、安野光雅作詞・森ミドリ作曲の合唱曲の演奏会の開催など、若者の関心を引く多彩なプログラムを計画する。

終わりに

「若い世代、特に中学生や高校生に対して、文学館はどのような働きかけ（事業）を実施すべきか」についての提言とそれを踏まえて実施された、または、実施予定の事業は以上の通りである。時間の関係等で、実施または実施予定にまで至らなかった協議事項については、「小・中・高校における読書推進活動の取り組み」の報告とともに、以下の「参考資料」に記載した。この「参考資料」が文学館の今後の事業に生かされていることを願っている。

以下、協議の過程で各委員から出された関係機関に対する要望等を記載した。一つひとつの要望等が早期に具現化されることを願っている。

1 市民文学館に対する要望

- (1) 中学生の場合、学習に役立つことがあれば、文学館を利用すると考えられるが、文学館の閉館が午後5時では利用しにくい。部活動などに忙しい生徒もいて利用には無理がある。閉館時刻の変更・延長が望ましいが、それが無理ならば、長期休暇中だけでも閉館時刻を遅くしてほしい。
- (2) 中学校での調べ学習に使う資料や、教科書で紹介している図書などが文学館にあると、文学館が利用しやすくなる。

2 市立図書館に対する要望

- (1) 小学校、中学校が図書館からたくさんの本を借り出す際、タクシーを利用しなくてはならなかったため、物流制度の要望が出ていたが、現在は物流制度が始まり、徐々に整備されて、学習を進めるうえで大変役立っている。今後も更なる整備を図っていただきたい。

3 教育委員会など、関係機関に対する要望

- (1) 学校図書館の図書のデータベース化ができるようになったが、学校予算の関係でできる学校とできない学校とがある。また、データベース化の特長や利点に対する教職員相互の共通理解も不十分である。データベースが各学校間で均等に使えるよう配慮するとともに、スムーズな運用ができるよう、一層のサポートを願っている。
- (2) 現在、町田市では図書指導員制度がなくなり、一括して「学校支援ボランティア」に組み込まれている。このため、この制度が実施されてから、図書指導員のいない学校も出てきて、児童・生徒が学校にいる間でも学校図書館を閉館する学校もある。

学校図書館が、読書センターとしての機能と、学習情報センターとしての機能を果たしていくためには、児童・生徒が学校にいる間は常に開館し、図書の選書指導、利用指導など、児童・生徒と本をつなぐ専門職員、図書指導員のい

ることが必要である。図書指導員の常駐の早期実現を要望する。

- (3) 2004年度以前には、全都立高校に専門職の司書が配置されていたが、2004年以降、昼夜開校の高校で司書は1名、それ以外は削減された。その結果、ある都立高校では、司書は午後から夜に勤務しているため、全日制では、司書教諭の資格を持つ教員が、教員の仕事を6時間減し、司書の仕事に当たっている。そのため、図書の整備、読書指導など、司書としての仕事が充分にできない。図書・資料の整備など読書環境の改善・充実、生徒に対する読書指導の支援等に当たる司書の増加を要望する。
- (4) 町田市のWebページで、随時、文学館の情報が更新・発信できるようにしてほしい。

参考資料－検討の詳細

第 I 部 小・中・高校における読書推進活動の報告

1 町田市のある小学校の取り組み

(1) 読書推進活動の取り組み

①読書タイムの概要

火曜日、木曜日、金曜日の週3回、午前8時30分から40分までの10分間を読書タイムに当て、今年度で3年目になる。読書タイムで読む本は児童自らが選択する。家庭から持参する児童もいるし、学校図書館から借り出した本を読む児童もいる。選書のバックアップとして、10分間くらいで読める薄い図書をそろえるなどして、学級文庫の整備に努めている。

皆に読ませたい本を家庭から持参して学級文庫に置く児童もいて、学級文庫も充実してきた。自分の選んだ本を、自分一人で読むのが原則であるが、低学年の児童に対し、週1回、教師や保護者が読み聞かせを行ったり、高学年の児童に読ませたい本がある場合には、読書タイムを利用してブックトークを行ったりもしてきた。

全学年の児童に、形式や内容は学年によって異なるが、読んだ本の名前、作者名、簡単な感想を書いておくという読書記録カードをつけさせている。児童個々の読書傾向を見たり、おもしろかった本を友だちに紹介したりする時の資料として使っている。読書タイムを設置した初めのころは選書に時間を要することがあったが、現在は10分間、各自がしっかり読めるようになっている。

②読み聞かせ

1学年から3学年までの児童に対しては隔週に一度、4年生以上の児童に対しては1学期に4回、保護者による読み聞かせを行っている。

昨年度から、学期に一度、副校長、専科の教師、他学級担当の教師などによる読み聞かせも行っている。教師が自分の好きな本を持ってきて読み聞かせをした後、学校図書館に置いておくと、それを手に取ったり、読み聞かせがおもしろくなったという教員も増えてきている。

③学校図書館の利用

各クラスとも、1週間に一度は図書館を利用する学習ができるような時間割を作成している。国語科、社会科での調べ学習、学級（読書の時間）の時間、総合的な学習の時間（以下、総合学習と記す）に利用することが多い。毎年4月、図書指導員による利用指導を行う。貸し出し作業、ブックトークの実施など、図書指導員の存在は大きい。

図書委員会の活動

図書委員は、日々の貸し出し、図書の整理のほか、前期、後期に1回ずつ、学校図書館で読み聞かせを行うほか、図書の紹介カードも作成している。

⑤地域住民との連携（年に1回、お話し会）

「NPO法人 まちだ語り手の会」に依頼して、1年に1回、1学級1時間単

位でお話会を行っている。ストーリーテリングや手遊びなどをして下さるので、児童たちも楽しみにしている。

⑥ P T Aとの連携（年に1回、読み聞かせ集会）

年に一度、読み聞かせ集会をしている。昨年は女優の中井貴恵氏を、今年は「朗読セラピー スイミー」による音楽入りの読み聞かせを行い、児童も大変に楽しんだ。

⑦ 市立図書館との連携（学習に必要な図書・資料の団体借り出し）

総合学習や調べ学習を行う場合、学校図書館の図書等だけでは対応できないため、今年はいくつかの絵本を市立図書館から借りて、2年生が1年生に1対1の読み聞かせを行った。多量の絵本をタクシーで運んだため、市が運んでくれる制度があると大変に助かる。

(2) 読書に対する児童の実態

- ① 読書タイムが定着し、その時間を楽しみにして、率先して読書する児童が増えた。「児童の本離れ」という声もあるが、児童は「本を読みたい」という気持ちを持っている。通塾や塾での宿題などの影響で、家庭ではなかなか読書ができない実態があり、学校の中でのわずかな時間にも本を読みたがる。
- ② 本は読むけれど、高学年になっても絵本から脱せず、長文の物語などを読みこなせない児童がクラスに約30%程度いる。長文の苦手な子でも、ブックトークをしたり、好きな先生が読み聞かせをしてくれたりすると、その本を手にする。
- ③ ダレン・シヤンの作品や「守り人シリーズ」など、ファンタジーは、児童の人気が高い。
- ④ 椋鳩十の「大造じいさんとガン」、重松清の「カレーライス」、新美南吉の「ごんぎつね」など、教科書に載る作家の作品はよく読まれる。
- ⑤ 高学年の場合、あさのあつこの「バッテリー」や森絵都の作品などが文庫化され、それを契機に大人の読む本を手にする児童も増えている。
- ⑥ 東野圭吾の「手紙」、田村裕の「ホームレス中学生」等、映画化された作品は教室で回し読みされている。
- ⑦ 「児童の本離れ」という感じはしないが、ケータイ小説等、易しい文章に流されていく傾向はあるように思う。
- ⑧ ケストナーの作品等、古典的な作品は、もっと読ませたい。

(3) 町田市立小学校教育研究会・図書館研究部の活動から学んだこと

「読みを楽しみ、学びを広げる図書館活動」という研究テーマのもとに、公立図書館司書によるブックトークを聞き、夏休みの推薦図書を決めるなど、様々な研究・研修を行っているが、特に学んだことは以下の通りである。

- ① ブックトークの研修においては、日本における児童図書の発行状況がよくわかり、どんな本を児童に手渡していけばよいかがよくわかる。また、夏休みの推薦図書の決める際の参考にもなる。

- ②アニメーションの研究会に毎年行っている。アニメーションによって、本の読み方、児童に対する本の読ませ方を学ぶことができる。
作家研究では（例えば「ケストナーの故郷ドレスデン」など）、児童が敬遠する古典作品の魅力を再認識できるとともに、小学校卒業までに児童に読ませるべき本の選定にも役立った。
- ④百科事典実技研修においては、情報センターとしての学校図書館の役割や在り方について、改めて考えることができた。
- ⑤児童の読書推進活動の中で大切なことの一つは、指導者である教師が読書することであろう。多忙なせいもあって、なかなか本を読めない教師もいるが、学校図書館を利用するなどして、最低限、1か月に1冊くらいは本が読めるようでありたいと思っている。

(4) 上記に対する提言等

上記の報告等に対し、各委員からたくさんの提言等がなされたが、それについては「第2部」に記載した。

2 町田市のある中学校の取り組み

(1) 本を読むことに対する中学生の感想

本を読むことに対する感想を聞いてみると、「本の中に入り込む感じが楽しい」「私にとっては新しい世界に行く手段。本の一つ一つに違った世界があって、毎回楽しめる」「(読書は) 友だちとの話題になる」「本はハマルとゲームより楽しいことがある」「(読書によって自分の) 考えが広がると思っている。本がなかったら、楽しみながら、他の人の考えを読めないと思う」などという答えが返ってくる。中学生は読書を楽しみながら、友だちとの日常の会話とはまた違う意味で、本の世界が自分の世界を広げたり、深めたりするのに役立っているという思いを持っている。

(2) 「朝の読書」を行っている。その大要は次の通りである。

- ①毎朝、8時30分から40分までの10分間、教員をも含め全校一斉に読書する。年間約1700分、約28時間読書することになる。
- ②実施のねらいは次のとおりである。読書の楽しさ・素晴らしさを知り、読書の習慣を身につける。すべての学習の基礎である、“文章を読んで理解する力”を高める。読書を通して、想像力、思考力、感動する心を養う。自分の読みたい本を自分で選ぶ体験を通して、自ら学ぶ力を育てる。
- ③読む本は「まとまりのある文章中心の本」とし、漫画、雑誌、新聞、写真集や教科書は除外させる。
- ④読む本は、各自に好きなもの、読みたい本を用意させる。家庭から持ってきてよいし、あらかじめ学校図書館等から借りておいた本を持参してもよい。
- ⑤「どのようにして本を準備していますか」という問いに対する回答では、「図書館

などで借りる」が最も多く、以下、「自分の本」「友だちから借りる」「学級文庫などで」「家族の本」の順に並ぶ。自分の本を持ってくる生徒が最も多いが、父親に勧められた本とか、母親が読んでいる本を持ってきて読む生徒も多い。

- ⑥この時間を、楽しく活用してもらうため、図書委員を中心に、「朝読書の活用」を呼びかけるポスターの作成・貼示、「君にすすめるこの1冊」という推薦図書リストの作成と配付等の演出に取り組んでいる。また、1年生に対しては、朝読書が定着するよう、図書指導員が朝、ワゴンによる貸し出しを1週間ほど行っている。
- ⑦「朝の読書」に対し、生徒は「中学生になって部活や宿題などで家ではなかなか本を読む時間がとれない。朝読書の時間にはゆっくり読めるのでうれしい」と述べている。朝読書の時間が貴重な読書の時間になっていることがわかる。
- ⑧また「本を読むことが好きですか」という問いに対する回答では「好き」が最も多く49%を占め、以下、「中学で好きになった(28%)」「あまり好きでない(20%)」「嫌い(3%)」と続く。「中学で好きになった」には朝読書の影響もあると思われる。読む時間があれば、読み始め、読書が好きになる、ということを示している。
- ⑨「中学生になって友達が読んでいるのを見て小説を読み始めたら面白いことに気づいて小説を読むようになった」という生徒は多い。きっかけさえあれば、子どもたちは読み始めると思われる。
- ⑩読書量から見ると、1年生がいちばん読む。よく読む学年では本が動く。動くから新しい本が読みたくなる。新しい本が入ると、それが口コミで生徒間に広がり、読まれるという相乗効果を上げている。
- ⑪朝の読書が定着しても、忙しさで朝の読書の時間が確保できなくなると、読書の習慣は崩れてしまう。地道に毎日続けることが大切である。今、60%以上の学校で朝読書に取り組んでいるが、毎日行っている学校は少ない。毎日行わないと読書の定着は難しいと思われる。

(3) 学校図書館運営の実際等

子どもたちは、生来、知的好奇心を持っている。しかし、周囲の者が種をまき、それを丁寧に育てていかないと、子どもの好奇心は育たない。学校図書館は、子どもに知的好奇心の種をまき、それを育ててくれる大切な場である。その学校図書館は、生徒の自由な読書活動や読書指導の場として「読書センター」としての機能と、教育課程の展開に寄与する「学習情報センター」としての機能を果たし、学校教育の中核的な役割を担う場である。

学校図書館の機能を駆使して教育課程を展開しているが、その実際を2006年度の1年生に対する事例で示した。(p35参照)学校図書館と連携して教育課程を展開するに当たっての配慮事項と主な事例は次の通りである。

- ①4月には、朝読書と図書館オリエンテーションは必ず行う。図書館オリエンテーションをクイズ形式にしたり、クイズを使って本探しをしたりしている。例えば「動物の出てくる詩の本を1冊探しなさい」と問い、「図書名と出版社名」を答

えさせるなどである。

- ② 夏休み前には、図書指導員と連携して、クラスごとにブックトークを行い、こんな本を読もうと呼びかけている。
- ③ 「総合的な学習の時間」を進めるに当たっては、例えば「ポプラディア」を各班に1セットずつ配付し、それを使って資料の活用の仕方を指導する時間を設ける。
- ④ 「総合的な学習の時間」で、例えば、「地雷」について学習する場合には、図書指導員との協力・連携のもとに、地雷に関する文献リストを作成し、必要な図書は必ず用意している。
- ⑤ 修学旅行等の学校行事に際しては、図書指導員と協力・連携して、その行事に関連する図書を用意している。また、地域の方に授業をしていただく「社会人先生の時間」に際しては、その授業に関連する図書を準備しておくようにしている。図書指導員が生徒一人ひとりに対する適切な図書の紹介と学習支援に当たり、図書委員が中心になって朝読書を支援し、読書の楽しみと知的好奇心の広がりを目指す。教員は生徒一人ひとりに知的好奇心の種をまき、それを育てる授業を行っていかうと考えている。そのためには、生徒一人ひとりを見ながら、その生徒にあった本を紹介してくれる人、必要な資料について紹介してくれる人、資料と一緒に探してくれる人、探している資料がない場合、別の資料を渡してくれる人の存在が必要である。

また、教員にとっても、授業で扱う教材の価値を更に広げ、深めるような資料について、教員とともに考え、助けてくれる人の存在が必要であるが、その願いに応えてくれる存在が図書指導員である。学校図書館の機能を駆使するためには、いつでもそこにおいて、指導・助言してくれる図書指導員の存在は絶対に必要である。

学校図書館における年度別総貸出冊数は、2002年度は2,438冊、以下、年度順に5,375冊、4,602冊、5,180冊と推移し、2006年度は5,392冊であった。2007年度は新しい本が増えたこともあり、貸出冊数も増えている。生徒の希望する図書が学校図書館にない場合もある。そのような場合には、市立図書館の団体貸出制度を活用している。

(4) 生徒の読書の現状等

中学生がどのような本を読んでいるか、それについて、2007年度における2年生1クラス32名を対象として行った読書調査の結果の概要とそれに対する手立ては次の通りである。

- ① ケータイ小説が多く読まれていること、クラスの生徒の口コミで本が選ばれたり、広がったりしていることがわかる。
- ② こうした読書調査、図書指導員から示される読書傾向などを踏まえ、一人ひとりの生徒の関心にあわせてほかの本を紹介したりして、読書の幅を広げることに努めている。
- ③ 年に数回、読書紹介を廊下に掲示するが、これを見た生徒の口コミで本が広がっ

ていく。

- ④最近（2007年）は「がばいばあちゃん」「一瞬の風になれ」「リバウンド」など職員室でも本が動く。職員室での読書の話題が教室での話題の広がりにもつながり、図書館への意識が高まる効果を生んでいる。
- ⑤生徒が自分一人の力では読めない本も、皆で一緒に読みあう場を設定することで、読書の楽しみがひろがる。

（5） 町田市中学校教育研究会の活動等

- ①参加校は中学校20校のうち12校、誰が図書指導員なのか分からない学校もあり、広がらないのが悩みの種である。
- ②学校図書館の見学、(生徒の書いた)読書感想文の審査、学校図書館のディスプレイの作成等を行っている。
- ③2007年度は、互いの学校図書館を訪問しあい、運営等についてのヒントを得るという目的で、4校の中学校による学校図書館交流会を行った。
- ④和光大学図書館において検索の仕方、中央図書館でレファレンスについて学んだ。

（6） 学校図書館の運営に関する要望等

- ①図書等の購入に対する市教委の予算額は極めて少額なので、PTAから補助を受けるなど苦労している。市教委の特別図書予算がつく場合もあるが、その予算を使い切り、かつ、購入した本が動いていないと、翌年は削られることもあるという単年度予算なので使い方が難しい。学校図書館がその機能を十分に発揮し、多様な生徒の成長に資するためには、予算の更なる増額が求められる。
- ②既述したように、学校図書館がその機能を十分に発揮していくには、司書教諭、図書館指導員、教職員との緊密な協力・連携が必要である。

司書教諭は12クラス以上の学級を有する学校に対し、司書教諭の資格を有する教員が1日2時間、学校図書館の業務に携わることを認めるものである。

また、各学校には図書指導員がおかれ1日4時間以内の勤務に就いている。実際は、契約時間以上の仕事をしてもらうなど、図書指導員の自己負担は大きい。

学校図書館の機能を十分に果たしていくために、司書教諭、図書指導員の勤務条件、待遇などについての見直し、改善は早急の課題である。（現在はp.15に記述してあるように「図書指導員」は廃止）

3 町田市内のある都立高校の取り組み

（1） 学校図書館の利用状況

2009年に創立80周年を迎えるこの学校図書館は、近隣の高校に比べると、規模も大きく蔵書数も多い。年間の受け入れ数は約500冊、現在の蔵書数は約5万冊、中には現在に至っては入手しにくい貴重な図書等もある。

しかし、学校図書館の利用状況は、1994年度以降、次第に減少している。1994年度から2004年度までの貸し出し状況は以下の通りである。

年度	貸出冊数	一人当たりの冊数	文学書の占有率
1994	2900	2.6	27.5
1995	1600	1.5	31.5
1996	700	0.7	57
1997	900	0.9	44
1998	850	0.8	47
1999	950	0.9	48.5
2000	700	0.7	46
2001	800	0.8	52.5
2002	500	0.5	65
2003	420	0.5	60.5

2004年度以降は記録がない。

この表に見る通り、貸出図書の全体数も、一人当たりの貸出冊数も減少しつつあるが、その原因として以下のことが考えられる。

①1995年度の減少

第1は、生徒減少に伴う学級減の実施である。学級数が10クラス(1200人)から8クラス(900人)と減少した。

第2は学校5日制の実施による学習形態の変化である。高校の学校図書館は、文学作品を中心に読む子が多いのが特徴であるが、それでも1994年ころまでは、社会科、理科などの教科では課題学習も実施され、課題追求や課題解決のために文学作品以外の図書も多く借り出されていた。しかし、学校5日制の実施による授業時間数の減少により、生徒の発表を伴うような学習は行いにくい状況になっている。

②2003年度の減少

教科「情報」の実施に伴うマイナス要因である。2002年度から、教科「情報」の実施により、インターネットを利用しての資料収集、それに基づく課題解決が増加した。インターネットの提供する情報は概略的な情報が多く、結果として安易な調べ学習、図書等を使わない調べ学習をするようになった。

③2004年度以降の状況

2003年まではすべての都立学校に司書が配置されていたが、2004年度以降、司書は、この学校のように昼夜に開校している学校には1名、それ以外の学校は削減された。現在、この学校に配置された司書は午後から夜にかけて勤務しているため、昼間は司書教諭の資格を有する教員が、教員としての仕事を6時間減して司書の仕事を行っている。このため、たとえば、生徒一人ひとりの読書傾向を見たり、それに基づいて個々に読書指導を行ったりするまでには至らないという現状がある。

(2) 現在の高校生の読書傾向と生活

標記に関する生徒の現状は次の通りである。

- ①本をたくさん読む生徒がいる反面、1冊も読まないという生徒が皆無ではない。読まない生徒はゲームや漫画など、ビジュアルなものに依存し、新聞も雑誌も面倒なので読まないという。
- ②ヤングアダルトを読む生徒が多い。学校図書館では、生徒にもアンケートをとって購入しているが、ヤングアダルトの占める比率が年々高くなっている。ヤングアダルトも、その中の青春もの、ミステリー、歴史SFもの、ファンタジーの中から自分の好きなジャンルにしぼって選ぶ傾向がある。また、歴史ものでも、例えば、「戦国自衛隊」だけを読むなど、自分の好みに限って読むという傾向もあり、自分の好きな本を入り口にし、それに関連する図書に広げて読むということがない。その意味では小・中学生より読書の間口が狭くなっていると言えるかもしれない。

自分の好みに限って読むという傾向により「この本、おもしろいよ」とか、「今、どんな本を読んでいるの」とか、友人どうしで読書を話題にすることもできなくなっている。その結果、本に対する興味・関心が広がらないという面もある。
- ③自らの興味や関心を踏まえて、難解ながら本格的な哲学書や評論書などに挑戦することが少なくなっている。
- ④大学入試への対応に迫られ、短い文章から解答を探し出すという読み方に時間をとられ、本を楽しんで読む、味わって読むということから次第に遠ざかっている。

(3) 読書推進のための取り組み

①「課題図書」の提示と読み取りの状況

以前は、生徒たちに選ばせていたが、現在は、教員が自らの考えに基づき、文学作品を中心に選び、「課題図書」として課している。また、「課題図書」に対する取り組みや成果の状況を見るため、選択肢方式によるテストを実施し、その結果を教科の平常点に算入している。

ア 「課題図書」の一例（普通科・1年次）

- 芥川龍之介「羅生門・鼻」（新潮文庫）
- 森 鴎外「山椒大夫・高瀬舟」（新潮文庫）
- 泉 鏡花「高野聖」（角川文庫）
- 夏目漱石「坊っちゃん」（出版社を問わず）
- 志賀直哉「小僧の神様・城の崎にて」（新潮文庫）
- 横光利一「機械・春は馬車に乗って」（新潮文庫）
- 阿部謹也「ハーメルンの笛吹き男」（ちくま文庫）
- 川端康成「伊豆の踊り子」（新潮文庫）
- 谷崎潤一郎「春琴抄」（出版社を問わず）
- 太宰 治「人間失格」（出版社を問わず）
- 堀 辰雄「風立ちぬ・美しい村」（新潮文庫）
- 安部公房「砂の女」（新潮文庫）

シェークスピア「マクベス」(新潮文庫)

第1学年の生徒には、昭和期の安部公房までの著名な文学作品、文学者を取り上げるようにしている。「羅生門」は読みこなせるが、森鷗外や「坊っちゃん」は読み取れない生徒が多い。中学校の時に読んだ生徒もほとんどいない。泉鏡花や横光利一の作品など、マニアックな作品をおもしろがる生徒もいる。ただ、鏡花や利一の他の作品が文庫化されていないので、他の作品にまでは広がらない。図書館で全集を借りてまで読もうとはしない。

イ 「課題図書」の一例(普通科・2年次)

F・カフカ「変身」(新潮文庫)

スウィフト「ガリバー旅行記」(岩波文庫)

ドストエフスキー「罪と罰」(出版社を問わず)

ファラデー「ロウソクの科学」(角川文庫)

カミュ「異邦人」(新潮文庫)

H・ジェイムズ「ねじの回転」(新潮文庫)

スティーヴン・キング「キャリー」(新潮文庫)

夏目漱石「こころ」(新潮文庫)

夏目漱石「彼岸過迄」(出版社を問わず)

夏目漱石「行人」(出版社を問わず)

第2学年の生徒には、夏目漱石の「こころ」が教科書に載るので、「こころ」以外の漱石作品を入れるほか、海外の文学作品を中心に選定している。

ウ 「課題図書」の一例(職業科・1年次 普通科と共通以外の作品)

宗田 理「ぼくらの七日間戦争」(角川文庫)

筒井康隆「時をかける少女」(角川文庫)

北川悦吏子「ビューティフルライフ」(角川文庫)

吉本ばなな「キッチン」(角川文庫)

村上春樹「風の歌を聴け」(講談社文庫)

エ 「課題図書」の一例(家政科・2年次 普通科と共通以外の作品)

モンゴメリ「赤毛のアン」(新潮文庫)

ワイルド「ドリアン・グレイの肖像」(新潮文庫)

スティーヴン・キング「グリーンマイル<1>」(新潮文庫)

梶尾真治「黄泉がえり」(新潮文庫)

橋部敦子「僕の生きる道」(角川文庫)

村上春樹「羊をめぐる冒険」(講談社文庫)

②職業科の生徒には分量のある作品、またテレビドラマになった作品を取り入れ、ドラマを見るだけでなく、その原作やシナリオを読んで本に親しませたいと思っている。2年生には「赤毛のアン」を取り入れている。「赤毛のアン」は、中学時代に読んでよいものだが、9割方の生徒は読んでいない。職業科の生徒には読書の習慣と離れている子が多い。

普通科の生徒も第1学年の後半ぐらいから、読む暇がなくなり本から離れてい

く。2年生の夏休みに、以前は「戦争と平和」(トルストイ)5冊を読ませていたが次第に読めなくなり、現在は「罪と罰」2冊にしている。しかし上巻だけを読んで挫折する子も多い。最後まで読むのは約30%くらいである。

4 渋谷区内のある都立高校の取り組み

第1学年の生徒には「小説」を中心に、第2学年の生徒には「論説文」を中心に「課題図書」を課し、課題図書1冊、各自が自由に選んで読んだ図書1冊、計2冊を、年間10回にわたって読ませる。読んだ結果を「読書ノート」に書かせて提出させ、コメントを添えて返却している。

第2部 文学館の事業について

1 本の世界、読書の世界に導くための導入的な事業

- ①(私の勤務する小学校では)地域との連携の一環として、「NPO法人まちだ語り手の会」にストーリーテリング等を委嘱しているが、子どもたちも楽しみにしている。
- ②(私の勤務する小学校では)読み聞かせ集会をしている。「朗読セラピー スイミー」の読み聞かせは、音楽入りで子どもたちも大いに楽しんだ。
- ③保護者の中には、図書館で行っている「読み聞かせ講座」を受講している人もいる。そういう人たちのために、文学館が「読み聞かせ」のための本の選定等をしたらどうか。

2 読書の幅を広げ、深めるための事業

- ①子どもたちは、皆で読んで、皆で意見を言い合うことが好きだ。
- ②(町田市内のある都立高校の)「課題図書」を皆で読み合えば、考え方、読み方が共有できる。
- ③上記①、②を踏まえて、作品をグループで読む読書会、読書感想発表会を行ったらどうか。
- ④子どもたちは作家に会って話を聞くことも喜ぶ。文学館でも取り組んでほしい。
- ⑤子どもたちは、作家を囲んでの作品の読み合いを喜ぶ。
- ⑥「作家・長谷川知子さんを囲んで」という会をしたが、その際、長谷川さんのサイン本を置いたら取り合いになるほどだった。
- ⑦作家をお招きしての講演会、作家を囲む会など、文学館でも作家と子どもたちを結ぶ会に取り組んでほしい。
- ⑧朝日新聞社の「オーサー・ビジット」に文学館も応募できるようになるとよい。
- ⑨(町田の高校の)「課題図書」はぜひ読ませたい作品だ。例えば、鷗外作品を現代の視点に立って面白く紹介してくれるような人を招いてブックトークをしたらどうか。
- ⑩ブックトークは、どんな本を小学生に手渡していけばよいかを知る上で役立つ。
- ⑪ブックトークは中学生に対しても必要にして有効だ。
- ⑫大学の授業で、宮沢賢治についての講義の後、映画やTV番組を見せると、学生たちも興味を持つようになる。
- ⑬「平家物語」の授業の際、生徒に群読や平曲を聞かせたところ、好評だった。
- ⑭AV資料を活用した読み方、読ませ方も有効である。
- ⑮「子どもの読む作家・作品、子どもに読ませたい作家・作品」について
 - ア 椋鳩十、重松清、新美南吉、宮沢賢治など、教科書に載っている作家の他の作品は好んで読む。
 - イ 「手紙」や「ホームレス中学生」など、映画化された作品はよく読まれる。
 - ウ 児童文学の文庫化が増えたせいか「バッテリー」や森絵都の作品などを読む

子が増えた。

エ ケータイ小説を読む小学生もいる。中学生でも増えている。

オ ケストナーの作品や、「赤毛のアン」など、古典的な読み物を読ませたい。

カ 高学年でも絵本から脱せず、長文の物語が読めない子がいる。絵本から長文の本に移行する過程の一つとして、会話の多い作品から入ったり、落語などの話芸の活字本から入るのもよい。

3 文章表現、創作などに興味・関心を持つ児童・生徒を対象とする事業

①中学生の中には、長いものを書き、自分で本にして回している子もいる。

②（私の勤務する中学校の）演劇部では、自分で脚本も書くし、ネタ本もある。詩の朗読もする。

③高校生の中には、文芸部や演劇部に所属し、創作や脚本の作成に励む生徒もいる。

そうした生徒たちの中には、創作のための基礎的・基本的な学習を求めている生徒、自らの作品を読んで批評してくれる人や機会、場を求めている生徒もいる。

④童話や絵本を書きたい大学生も多い。そういう人たちのために創作講座を設けたり、コンクールを行って、賞を授与したりすることも考えられる。

⑤小説を書くことが好きな子どもたちのために、文学館でそうした講座を設けたらどうか。

⑥作家を呼んで講演会をする場合、聞きたいのはテクニックかもしれない。

⑦言葉での表現意欲を持つ人たちに役立つガイドブックを示すとよい。また、そういう人たちのために、文学館が本にしてあげることも一つのやりかたかもしれない。

⑧中・高校生に、一つのテーマを与え、エッセイやノンフィクションなど、自由に書かせて短編集にしたことがある。文学館に来てもらうだけでなく、こちらから働きかけるのはどうか。

⑨生徒たちは自分が書いたものを読んでもらうことを望んでいる。そういう場を提供したらよい。文学館に設置した収納ポストに入れて来館者の閲覧に供し、読んだ人がコメントするのもよい。

メディアを活用するなどして、文学館は子どもたちの活動を世間に広く知らせるとよい。参加者も増えていくと思う。

⑩若い人が、集めて読んで評価して賞を出すというような取り組みはどうか。募集も応募も選考もすべてを生徒にまかせ、大人は世話だけを行うにとどめる。

4 音読・朗読など、音声による表現に興味・関心のある児童・生徒を主たる対象にした事業

(1) オランダでは、読書推進運動の一環として、読書財団が主宰して、15年前から「全国音読コンテスト」が行われている。このコンテストに参加する子どもは、基礎学校の最終学年の子どもたち（11～12歳）で、日本の小学校6年生に当たる。コンテストは、子どもたちがそれぞれに、自分の選んだ本がどんな本か紹介し、

その後、その本の一部を音読するというものである。ユニークなのは、紹介し音読する本を自分が主体的に定めるという点にある。オランダのこの運動は、町田市内の子どもたちを対象にして文学館でもできると思う。

紹介し音読する作品をそれぞれの子どもが選ぶというのはとてもおもしろい。また、どの作品のどこを読むか、それをそれぞれの子どもが定めるというのも文学館らしい取り組みだと思う。

一方、たとえば、町田の昔話などを対象にし、その中から紹介・音読する作品を選ばせたら町田の特色も出てくると思う。コンクールの実施によって、今まで読まなかった作品を読もうとする子どもたちも出てくると思う。音読は暗唱しなくてもよいから、取り組みやすいという利点もある。

(2) 優れた朗読を聞いたり、自ら朗読をしたりすることは、文学作品の魅力を実感する機会であるとともに、読む力を育て、高める機会でもある。その意味で、児童・生徒を主たる対象にした朗読に関する事業について

①朗読の専門家（プロ）や町田市内の朗読グループを招き「朗読を聞く会」を開催する。朗読を聞くことは、読む力を育て、聴く力を育てるとともに、朗読された作家に対する関心も出て、他の作品の読みに広がる可能性もある。

児童・生徒を主たる対象として想定しているが、大人が参加してもよい。また、たとえば、1年目は昔話の朗読を聞く、翌年は詩の朗読を聞くというように、様々なジャンルを取上げてよい。

②高知県立文学館主催の「児童生徒文学作品朗読コンクール」や兵庫県立こどもの館主催の「朗読コンクール」を参考に、町田市民文学館主催の「朗読コンクール」、「朗読発表会」を開催する。すぐに朗読発表会を開くのではなく、初めの年は上記①を、翌年に発表会を、という順序で開くようにしてもよい。

③演劇部、文芸部、放送部等の部員や朗読に興味・関心を有する生徒を想定して「中・高生を主たる対象とする朗読研修講座」を開催し、講師に、朗読を行うに必要な基礎的・基本的な事柄についての理論と実習を指導・助言してもらう。そして、そこで得た成果を次のような場で披露したらどうか。

◎小学校：「たてわり学習」「学芸会」「敬老施設訪問」等

◎中学校：「文化祭」「職場訪問」「ボランティア活動先」「市の行事」等

◎高校：「文化祭」「奉仕先」「ボランティア活動先」「市の行事」（文学館主催のシンポジウムに町田高校演劇部が参加し遠藤周作作品を朗読した）

「各種福祉施設」「視覚障害者等への奉仕活動」等

④児童・生徒を対象にして行うなら、「朗読を聞く場」「朗読をする場」「朗読について学ぶ場」を並列して行ったほうが参加しやすいと思う。

⑤展覧会とそこで取り上げた作家の作品を読むコンテストをセットした取り組みも考えたらどうか。児童・生徒の朗読を、作家にアドバイスしていただくと、子どもたちも喜ぶし、次への意欲も高まると思う。

⑥ワークショップ的な取り組みは、小学生に好評で、充実感も与えるようだ。展

示会、朗読、ワークショップ的なものを組み合わせた取り組みもよいと思う。
⑦展覧会のたびに、当該作家の作品を読むコンクールを行い、作家からアドバイスを受けて朗読力を高め、1、2年に1回、その成果をコンクールで披露するような取り組みも考えられる。

5 紙芝居の実演、上演に興味・関心を持つ児童・生徒を対象とする事業

①紙芝居は、絵本や読み聞かせと同様に、子どもたちを読書の世界に導くための効果的な手立ての一つだが、絵本や読み聞かせとは異なる特性がある。その特性は、紙芝居を演じることによって、演じ手と観客、観客相互の間に「共感」が生まれ、それが広がり、見終わった後、様々な話のできる雰囲気生まれる世界である。そこからコミュニケーションが生まれ、ともすれば閉じこもりになりがちな気持ちを開放し、観客相互の心をつないでいく。

②紙芝居は日本独自の文化の一つで、日本独特のメディアである。現在はアジアやヨーロッパの諸国に注目され、様々な国で紙芝居が作られ、演じられて、生きる喜びなど、様々なメッセージが人々に送られている。日本でも保育園、幼稚園など様々な場で、いろいろな紙芝居が演じられている。

③最近、小学校に行って紙芝居を演じたが、児童にとっても喜ばれた。

(私の勤務する小学校の) 学校図書館には、古いものではあるが、紙芝居がたくさんある。児童は、絵本とは違ったおもしろさを感じるようで、紙芝居が好きだ。最近読み聞かせに慣れっこになっていることもあり、紙芝居というワクワク感があるようだ。演じるほうも楽しい。

(私の勤務する中学校では) 夏休みに文学館で紙芝居講座を受講した。校内では図書委員会の催しとして、中学生同士で演じている。中学生でも演じられるし楽しめると思う。

国内外で紙芝居の講座をしているが、参加する高校生も多い。小さい子が好きだという高校生も多い。たとえば、4月ころから紙芝居や人形劇などに取り組んでもらい、夏休みにその成果を保育園等で発表するというような形も考えられる。

④紙芝居には「演じる」と「創る」の二面があるが、「演じる」場合にも、事前に、作品のテーマ、構成、表現等について学んだり、考えたりする必要がある。それに、1枚の絵に対する言葉の分量も少ない。たとえば、言葉(脚本)を、どのような間を取って読むか、ぬく、さしこむをどう工夫するかなどについても十分な練習が必要である。「創る」は紙芝居ならではの特性を活かした絵と文章で創るため、大変に難しい。まずは、「演じる」ところからスタートし、たくさんの良い作品に触れ、その様子によって「創る」に広げたらよい。

文章は長く書くよりも短く書くほうが難しい。文学館は「ことばらんど」なので学ぶ機会を設けてあげたらどうか。「紙芝居を創る」講座は、その一つに当たると思う。短い言葉で、かつ、図案化して伝える力は、これからの社会人に必要な力だ。そこを踏まえて、一人が絵を描き、一人が文を書くというよう

に集団が取り組んで「創る」のも意味があると思う。国際版画美術館で絵を描いている人がいるなら、文学館でそれに文をつけるという方法もある。

- ⑤まずは、紙芝居を「演じる」を目標にし、それに必要な理論や実技が取得できる講座を実施するのがよい。

対象としては、中・高校生のほか、小学校高学年の児童、専門学校生、大学生を含めてもよいのではないか。将来、保育、幼児・児童の教育に携わることを志望している学生などは、必要度も高いと思われる。

講座の実施時期は、春休み、夏休みのいずれかがよい。参加しやすいし、新学期に、その成果を披露するのがよいと思うからである。中学生は、講座の期間が長いと参加しきれない。実施期間は、2週に一度、2か月に4回程度はどうか。休み期間中、集中講座で2回はどうか。

講座の内容やその進め方については、参加者の興味・関心やニーズに応えたものであるよう十分な検討が必要だ。たとえば、「紙芝居を見よう」という講座を開き、沢山の作品を見ることから始めることも考えられる。子どもたちは、わかりやすいから昔話が好きだ。それに照らして、「昔話を演じる」から入ることも考えられる。紙芝居は子どもものものという印象があるが、宮沢賢治の作品を紙芝居にしたものなど、大人でも十分に鑑賞できる作品もある。賢治の作品は難しいが、紙芝居から入ると、親しみやすく、わかりやすい。

中学生は見ることより、演じることを好む。そこで、たとえば、講座を第1講座と第2講座に分け、理論の部分、講師の演じる紙芝居を楽しむ部分、参加者が自分で演じてみる部分を作るなどして、進め方を工夫することが大事だと思う。

- ⑥会場は、中学生以上の場合はPRも兼ねて文学館で、小学生の場合、文学館に来るのに支障があるなら地域の図書館などで催すことも考えられる。

- ⑦講座で得た成果を披露する機会や場や設けてあげたい。それを校外に求めるのが無理なら、校内や文学館で披露する機会は用意したい。前記「音読・朗読」に記した機会を活用するのも一案である。

夏休み創作講座「つくるぞ！自分だけの物語」受講者へのアンケート結果

ア 「物語の骨格」について

よく理解できた（6名、75%） 大体理解できた（2名、25%）

あまり理解できなかった（0名） 理解できなかった（0名）

イ 「今回聞いたやりかた」を

自分でもやってみようという気になった（6名、75%）

これくらいのことなら知っていた（0名）

自分が聞きたかったこととは違っていた（2名、25%）

ウ 表現（文章）の作り方について

よく理解できた（5名、63%） 大体理解できた（3名、37%）

あまり理解できなかった（0名） 理解できなかった（0名）

エ 今回聞いたやりかたを

自分でもやってみようという気になった（7名、88%）

これくらいのことなら知っていた（0名）

自分が聞きたかったこととは違っていた（1名、12%）

オ どういうジャンルで物語を作ってみたいですか？（複数回答可）

映画脚本：2名、TVドラマ脚本：1名、漫画の原作：4名

童話：3名、絵本：2名、小説：6名、演劇：1名

カ 物語を作る上で、もっと知りたいことは何ですか？（自由記述）

回答1 一人称の物語でも、もっとおもしろく書く方法

回答2 それぞれのジャンルに適した描写

回答3 物語を創る上で支えとなるもの

キ これから文学館のイベントでやってほしいことがありますか？

回答1 漫画家の話を聞いてみたいです。

回答2 今日のような講義をもっとしてください。

ク 次回、このような催しがあったら参加したいですか？

はい（6名、75%） いいえ（2名、25%）

夏休み創作講座「童話教室開きます！」受講者へのアンケート結果

講座終了後になされた、講師の作成による、受講者に対する「アンケート」結果は次の通りであった。

ア 「童話」の書き方のお話が

よくわかった（14名：82%） 大体わかった（3名：18%）

難しかった（0名）

イ 実際に童話を書いてみて

おもしろかった（9名：56%） 大変だったが頑張った（7名：44%）

難しすぎて困った（0名）

ウ 前に、何か物語を作ったことがあります（15名：94%）

今回が初めて（1名：6%）

エ これから文学館でやってほしいことは何ですか（自由記述）

回答1 いろいろなものを作る工作

回答2 絵と話を書いて本作り

回答3 絵本を作る（表紙も）

回答4 マンガをうまくかくイベント

回答5 絵本作り教室

回答6 詩の書きかたをおしえてほしいです。

回答7 工作教室

回答8 本のゲームなどをやってほしいです。

回答9 童話教室にかよった人の作品がよめるてらんかい

回答10 童話作家の人の作品にそって絵をかいて本をつくる。

回答11 パソコンで新聞作り

回答12 童話教室はとてもよかったので、またやってください。

回答13 コロボックルみたいに探しながら本を学ぶことが楽しかったので、他にも沢山やってほしいです。

オ また童話教室があったら参加したいですか

はい（15人：94%） いいえ（1名：6%）

用語解説

- p. 3 **ストーリーテリング** (最新図書館用語大辞典による)
物語を覚えて子どもたちに語ること。文字を十分に読めない子どもでも物語を楽しむことができるので、読書への導入手段として用いられる。
- p. 3 **エプロンシアター** (最新図書館用語大辞典による)
エプロンを舞台にした人形劇の形態のひとつ。エプロンの必要個所にマジックテープをつけ、人や動物など、人形を貼り付けながらお話を進めていく。
- p. 3 **パネルシアター** (最新図書館用語大辞典による)
パネル布又はフランネル地をベニヤ板等に張り付けて舞台を作り、表現したいものを不織布で絵人形にし、パネルに貼ったり取ったりしながらお話を進めていく手法。物語の展開によって絵人形を移動させたり、あるいは裏返し、重ねるなど、様々な動きをさせることにより、子どもたちをより引きつける。
- p. 3 **ペープサート** (最新図書館用語大辞典による)
割りばしなど、串の両面に同一人物の異なった動作の絵を描いた厚紙を貼ったうちわのようなもので演ずる平絵人形劇。保育や教育の現場ではよく活用される。
- p. 3 **ブックトーク** (最新図書館用語大辞典による)
あらかじめ選んでおいた数冊の本を、参加者にそれらの本について読書意欲を起こさせることを目的に紹介する。新しい分野に興味と関心を引き起こす読書への動機付けとして効果がある。
- p. 3 **群読** (国語教育研究大辞典、高橋俊三氏による)
複数の読み手で朗読すること。単に声を合わせて読むのではなく、文脈に応じて、個人で、数人で、または集団で読みを分担し、作品の朗読を完成させていこうとする読み方。
- p. 3 **アニメーション** (有元秀文氏の解説による)
『読書へのアニメーション』はスペインのモンセラ・サルト氏が、子どもたちに読書の楽しさを伝え、子どもが生まれながらに持っている読む力を引き出そうと開発・体系化した読書指導メソッドで、75の方法がある。
それらの方法を使い、読書をゲームとして楽しみながら読解力・表現力・コミュニケーション力を育てることができる。

- p. 10 **ワークショップ** (カタカナ新語辞典による)
参加者に自主的に活動させる講習会
- p. 28 **オーサービジット** (読書応援団HPによる)
朝日新聞社主宰・出版文化産業振興財団協力で行われている、読書推進プロジェクト。子どもたちに人気の本の作者(オーサー)が全国各地の小・中・高校などを訪問(ビジット)する取り組み。
- p. 28 **平曲** (広辞苑による)
日本中世の語り物のひとつ。平家物語を曲節をつけて琵琶の伴奏で語るもの。

協議の経過

	年月日	会 議	内 容
1	2007年10月4日(木)	2007年度 第1回運営協議会	諮問「若い世代に対して文学館として実施すべき事業、実施が望ましい事業とは」を受ける。
2	11月29日(木)	第2回運営協議会	文学館概要、施設見学、 今後の議題設定について協議
3	2008年1月21日(月)	第3回運営協議会	児童の生活実態と読書傾向の現状 (小学校編)について報告と意見交換
4	2月18日(月)	第4回運営協議会	生徒の生活実態と読書傾向の現状 (高校編)について報告と意見交換
5	3月6日(木)	第5回運営協議会	生徒の生活実態と読書傾向の現状 (中学校編)について報告と意見交換
6	5月22日(木)	2008年度 第1回運営協議会	今後の協議内容の検討
7	6月13日(金)	第2回運営協議会	「紙芝居」について協議
8	7月7日(月)	第3回運営協議会	「紙芝居」について協議
9	9月17日(水)	第4回運営協議会	「紙芝居」について協議
10	10月28日(火)	第5回運営協議会	「大学読書人大賞」について報告と 意見交換
11	11月26日(水)	第6回運営協議会	「朗読」について協議
12	2009年1月14日(水)	第7回運営協議会	「読むこと、聞くこと」について協議
13	3月4日(水)	第8回運営協議会	2009年度文学館事業に対する協議
14	4月21日(火)	2009年度 第1回運営協議会	2009年度文学館事業に対する協議
15	5月20日(水)	第2回運営協議会	答申作成に対する協議
16	6月17日(水)	第3回運営協議会	答申作成に対する協議
17	7月30日(木)	第4回運営協議会	答申作成に対する協議

町田市民文学館運営協議会 委員

(敬称略)

氏 名	備 考
石井 律子	学校関係者
太田 瑞穂	学校関係者
鬼塚 淳子	市民
川合 裕子	市民
国松 俊英	学識経験者
小寺 美和	学校関係者
野坂 悦子	学識経験者
◎ 野沢 穰	学識経験者
吉目木 晴彦	学識経験者

◎印は委員長

*50音字順

